

2023

第402号

真宗大谷派京都教区 教 化 広 報 誌

Shinran \$50

意味をたずねていこう

◇南無阿弥陀仏

花もよし、 落ち葉もよし

今月の「ことば

CONTENTS

2・3面

連載 第 11 回 真宗教団の中の 女性たち

見義 悦子氏

4面

今、この時に、 親鸞聖人に遇う

近江第9組

西村 沙羅氏

5面

特集 フィールドワーク

部落差別問題に学ぶ 同朋協議会

前田 賢龍氏

6面

特集 研修会

「是旃陀羅」問題について 部落差別問題に学ぶ 同朋協議会

比叡谷 真 氏

7面

教務所からのお知らせ

8面

今月の行事予定



第十一回 女性室の取り組み②

〈女性室公開講座〉(資料一一五、一一六)

律の中の男女の問題などを学んだ。毎回ほぼ 学ぶところから始めた。 ず大谷婦人会館を会場に、 将来に対する構想を明確にすることにした。 満席だった。 以後、ジェンダーの視点やメンズリブの運動、 できる時間帯に開催し 段写真)を掲げ、教団の現状と課題を確認 会の女性解放、 会場にはこのタペストリー(グラビア34、 男性解放に向けた取り組みに 「解放」の意味を学び、 仕事帰りの人も参加 男女の現状と、 ま 法 社 中

> 「女たち男たち」は 歴史の中で社会の中で いったい 自分のことなのに 自分でよくわからない 自分でよくわからない 「女」であることが なぜこんなに



グラビア 34 タペストリー

すでに用意された

「女らしさ 男らしさ」でしか

語られていないから?

いろいろあっていいはずだよね

いま始めましょう「女」も「男」も

寄り合い談議を

女たち」と「男たち」

0

大谷婦人会館での開催と並行して公開講座の性史に学んだ。一方で二○○○年十二月からとして、古代・中世・近世・近代・現代の女として、古代・中世・近世・近代・現代の女―女たちと男たちの寄り合い談議―

望んだ。
望んだ。
望んだ。
望んだ。
な性の積極的な参画を期待してであった(教女性の積極的な参画を期待してであった(教体討されつつあったため、教区教化委員会へのにおいて、教区教化委員会の体制の見直しが

教区開催も始まった。それはちょうど各教区

〈男女両性で形づくる教団をめざす協議会〉

る場を設けた。

区を対象に、公開講座開催後の教区の取り組区を対象に、公開講座開催後の教区の取り組

きた。
題として受け止められないという現実が見えて一般の問題として棚上げにし、自らの信心の課一般の問題として棚上がにし、自らの信心の課意識の根深いことに加え、性差別の問題を社会

〈広報誌『あいあう』と『メンズあいあう』〉(資

料一七

て?』を発行して、女性室開設の紹介をし、年三月に『あいあう』創刊準備号『女性室っ教団内外に広く情報発信するため、一九九七

盾

報誌 題が単に女性の側の問題ではなく、 する意味で発行した。 ひとりの意識が問われているものであること。 を発行した。これは坊守の問題や性差別の問 とした。二〇〇五年度からは『メンズあいあう』 団内全寺院と関係機関等に無償配布すること 広報誌の名前を一 そして男性もまた「男らしさ」というジェンダー 縛りから解放されるべきであることを提起 や男性中心社会と、 『あいあう』として創刊号を発行. 般公募した。 それをつくりだす一人 同 年八月、 実際は住 教 広

講座や研修会などで使用できるように貸し出 子は各寺院に無償配布し、 ば集』の冊子(グラビア37)を作製した。 あうカルタ』と『女と男のあいあうカルタこと すこととした。家庭や社会、寺院などでの夫婦 女・ また、二〇一一年三月には『女と男のあ 住 職と坊守等の カルタは各教区での ₩ € √

用されている。 通して気づき、 関係に潜む思い込みや矛 問題を考えていくため ら男女平等参画 点 クショップ等で利 疑問等にカルタを 共感しな とい 古行

が



グラビア 37 あいあうカルタ

(女性住職の集い (現・真宗女性僧侶の集い) >

担

ぞれの事情や背景の中で、 が開催された。 ŋ 性たちからの無自覚な排除や偏見、 題が確認された。 者として寺を運営している女性たちの現状と課 抱えていることや、 共有していく場がないことから企画した。 性たちが抱えているさまざまな問題を確認し、 抱える悩みに共感したり、 ハラスメントなど、 を貼られることに対する違和感や、 たちであったが、 二〇一〇年二月に第一回 する場となっている。 この集いは、 その多くが女性ゆえの悩みを 「女性住職」というレッテル 同じ境遇にある女性たちが 住職ではなく、 住職に就任した女性 活動のヒントを得た 「女性住職の集い 住職に就任した女 あえて代務 直接的 周 囲 それ 一の男 な

とである。 の課題ではないという受け止めが根強くあるこ こだわり続けている。 出遇いの教学とも、 えないのだろうと女性室を退いてからもずっと か見えないという声をよく耳にする。 を列記した。 に指摘されてきたはずである。 以 上、 大まかに女性室が活動してきた内容 この問題は、 外からは女性室が何をしているの 関係の教学ともいえる。 一つは社会の問題は信心 部落差別の問題から常 真宗の教学は、 なぜ見

> 事な課題である。 る。 課題と位置づけ、 め、差異を生きる人々の声を聞き合うこと(女 を確かめ続けたい。 そ社会のさまざまな問題を通して自分の足下 感じる。 性と男性の関係が問いにくくなっていることを が常に問われているはずである。 て欲しい。 女性を位置づけてきた制度機構の再点検を まで目の前にいるのに見えていない存在とし たちと男たちの寄り合い談義) れた自己満足の世界」といわれる。 会に起こるさまざまな問題 人ひとりが陥りやすい世界である。 の固定化が長く続いていることによって、 真宗門徒となるために。 「胎宮」という言葉がある。 そのためには性差別の問題を最 これまでの教団の歴史を確 毎年確認することが願わ 性差別は最も見えにくい大 や を通して、 他 やはり役割分 者との関 常に私たち だからこ 「閉じら いま 重 女 n

※資料は『女性史に学ぶ学習資料集』(真宗大谷派解放運動 推進本部女性室 編)より抜粋

公開講演会開催のお知らせ

す。詳しくは本紙七頁か、教区 女性たち」の公開講演会を開催しま 十一月八日(水)に「真宗教団の中の ページをご確認ください。



今、との時に、



間 わ れれる私

近江第九組 妙宗寺 衆徒 西に 村 沙羅ら

だろうか。 私は今、 この時に、 親鸞聖人に遇うているの

みは止まる。 親鸞聖人に遇う」ということなのだろう。 に出遇い続ける」ということが、「今、この時に の知識であり、 葉の外に立ってその表層を眺めただけではただ えられる通り、 かし気を付けなければならないのは、 が身を置き、 て月を視ざる」(『真宗聖典』三五八頁)と譬 教えに遇う」ことであると私は聞いた。 「親鸞聖人に遇う」ということは「親鸞聖人 つねに移ろっていくものである。移ろう この時」に、「親鸞聖人の教えの中に我 親鸞聖人が出遇われたものに共 一方、「今、この時に」という「今」 「得た」と思ったその瞬間、歩 お聖教にある親鸞聖人のお言 「指を看みし

> 引っかかっていたこと、なんとなくモヤモヤし 明確な問いであるとは限らない。 ていたこと…そうしたことが、 出遇いと問いは表裏一体だ。それは必ずしも、 もに共通していることは、その出遇いの裏に必 ·問いがある、ということではないだろうか。 遇いかたは人それぞれであろうが、 自分に「何か なんとなく 誰

の よそこから、 遇いは答えではない。 かされる。 出遇いと同時に、自らがその 出遇いであると気付かされ、 があるからこそ、 を問わせる。「何か」が何な れない存在であることに気付 何か」を問わずにはいら 教えに遇ったときそれが かわからなくても、 親鸞聖人との出 本当の問いが始 親鸞聖人 いよ 問

私自身を問う視点を頂くこ うことは、とりもなおさず、 親鸞聖 人に遇う」とい

問い続ける

と思ったことでも、 自覚させられる。 われる私に終わりはない。

> 言葉が、今日の私には流れこんでくる。 かない一方で、 たお聖教のお言葉が、今日の私にはちっとも響 あの時の私に聞こえなかったお

と信じたものを固く固く握り締める。握りし 日々の生活に追われる中でまた自分が正しい た拳を振りかざす私は、 仏法を聞いてほぐれたと思ったこの拳も、 自己を問わずに、

め



まるのである。

とである。 人の眼差しを通して私は自らの 問われる私であるというということを どこまでも深く自己を問う親 「問い」を問 鸞聖

とも下がっていない。 ようやく下がったと思った頭が、実はちっ 時を変えてまた問われて あの時、 私に届いたと思っ 何度も問うた

> 問うことを忘れ、気に入ら 遇ってきたのか。仏法を、 そこに打ち据えられているの を振り上げる。 れたそばから、 もりになって、 鸞聖人の教えを聞いているつ を聞いてきたのか、 は私自身だ。ああ、 他者ばかり問う。他者を散々 打ち据えてから見下ろすと、 他者を見つけては必死に拳 おりませんでしたと項垂 やっぱり聞い また自己を 何に出 私は何

問いに立ち返ることができるのはきっと、自己 そんな「今」を繰り返しつつ、忘れてもまた 忘れた時、 完全に見失うのであろう。 からである。 を問う親鸞聖人の眼差しと出遇い続けている ら問うことを怠り、 私は親鸞聖人を、 その眼差しに立ち返ることすら ことが大事と聞いたそばか また問われ、 そして私自身を また忘れる。

私は今日も、 問われ続けている。

特集 部落差別問題に学ぶ同朋協議会 フィールドワーク報告

部落差別問題に学ぶ同朋協議会(旧・同 会)の学習会レポートをお伝えします .和協

部落差別問題に学ぶ同朋協議会 前 田だ 野龍

施することを担当班で確認しました。 フィールドワークを行いました。 二〇二三年六月五日、 学ぶことができる場所と内容で実 京都市三条地区にて 広域の京都教

①として、雨森慶為さん(長浜教区頓證での研修の二点を行うこととしました。 江戸期の東本願寺火災時も、 住職)より、 落のかかわり②京都市内被差別部落(東三条 準備態勢を行ったことや、 も、京都市内の各被差別部落が消火・防火活動・ その結果、 当時の瓦版や記事などを見ながら、 ①東本願寺と京都市内被差別部 被差別部落の人々の 明治の再建時期 寺

仰のありようをお話されました。

より、 田茂樹さん(部落解放同盟京都府連副 きず縁の外より対面したなど、 く明らかに差別している姿をお話しされました。 面する際も、 できないことや、ご門首(当時はご法主)と対 が20までは、 また江戸時代には、 「東三条地区現地案内」として木下松 得度の折に本山で剃刀(おかみそり) 「京あまべの歴史に学ぶ」として安 おそらく建物の中に入ることがで 被差別部落の寺院に所 同じ地平ではな 委員長

> 長)よりお話をお聞きしました。 さん(部落解放同]盟京都府連合会東三条支部

りの監視などの理由 土塁建設や、 講義では、 織田信長親子の追弔、 「京あまべ」の歴史をさかのぼり、 豊臣秀吉によって洛中 京への出入

たのが、 ました。 であるとお話され から洛外である現 在の地へと移転され 「京あまべ」 世

と。 町時代には、 いたこと。 履の裏に皮をつけ 細工」と呼ばれる た牛や馬の弔い て人間の弔いをして たもの)をつくって もするようになった いたことから、 人たちは、雪駄(草 四条お庭者」と そして、 皮を扱う仕 「清目役」とし また「河 あるいは 中 倒 原 事 室 で を れ

銀閣寺や龍安寺などで作庭していたこ

呼ばれ、 聞きしました。 あまべ」で作られたものもあること、 講義を受けた後、 東西両本願寺にある太鼓は、 木下さんからは、 昭和でも「京 などをお 村の四・ 方

> 宅、 であったこと、 れまでの歴史と現状をお聞きいたしました。 を 掘り割で固 子への教育など、 められ 「同和対策事業」 たあとや、 街を歩きながらこ での各時代の住 出 入りは 0

私は、 実際にいま生活している日常生活 中で訪ねていると、





田茂樹氏 4掘割付近の壁(現コン ■雨森慶為氏 2木下松二氏 3安 クリート下は前のレンガが見える)

感する場所である みの歴史と熱を実

ことに驚きました。

とりもどす取り ら現在にいたるま こともありました。 いたことに気づく 分勝手に想像して ともに、 を誤解なく知ると ました。その事実 にすることになり 態」をまのあたり り続く「差別の実 から現在につなが あらためて、 同 差別とたたか 時に、 人間の尊 偏見や自 中世か 中世 :厳を 組

まべ」についてお話をうかがい、 合いができるといいと感じました。 みの案内となりましたが、 残念ながら会場の都合もあり、 ぜひまた 参加者で話 協議 会委員

0

部落差別問題に学ぶ同朋協議会 「是旃陀羅」問題について

会)の研修会レポートをお伝えします。 部落差別問題に学ぶ同朋協議会(旧・同和協議

部落差別問題に学ぶ同朋協議会 比叡なたに **真**z

重教区の藤井慈等氏に講義いただいた。 総会が開催され、 会(現「部落差別問題に学ぶ同朋協議会」)」 去る五月十七日、二〇二二年度 引き続き研修会として、 「同和協議

との大切さを確かめられた。 宗教的課題として部落差別問題に向きあうこ 題に直接に携わり、また、 輪番差別事件糾弾会など、 憶念しながら歩んでこられたことを紹介され 藤井氏が本山職員として、 以来差別の問題を 教団の部落差別問 難波別 院

がはらんでいる差別体質であることが、「是旃 てきたのは、 のであるが、 おける米田富氏 水平社宣言・ 旃陀羅」に関する問題提起は、 県連)による『仏説観無量寿経』中の文言「是 ままなのではないかと問いかけてくださった。 そして、 の問題にぶつかってもなおぼんやりした いわば「第三の糾弾」とも呼ぶべきも 部落解放同盟広島県連 教団に属する私たち一人ひとり そうした糾弾から問われつづけ 難波別院輪番差別事件糾弾会に (部落解放運動家)の発言に 教団にとって、 (以下広島

考えつづけたいと思う。

ずねられ、 連の問題提起を、 読む手がかりとして、『教行信証』や御和讃 は塗りつぶそうとする風潮があるが、 す すすめていただいた。 など、親鸞聖人の言葉をたずねていくことを れる課題を、 までも自身の差別意識を問題とする機縁とし ていただくことを大事にしたいとお話された。 'n 講義後半では、「是旃陀羅」 ば経典から語句を取りのぞこう、 在、 是旃陀羅」 あらためて『仏説観無量寿経』を お聖教や先学の言葉に丁寧にた 私たち一人ひとりが、 の問題に関して、 問題から問わ 広島県 あるい بر ح とも

との大切さを、 にどう回答していくのか、 陀羅」についての問題提起 自身の問題として、 て教えられた。 いかけを聞きつづけるこ れた幾多の先人からの問 差別問題に関わってこら る私自身が、「親鸞さま、 を背け、 しますか」という、 藤井氏の講義から、 お寺の生活を送っている気になってい また、私 あらため 「是旃 部落 自らの差別体質から目 果たしてここにま

了温 題に長く関わられた竹内 個 かつて宗門の差別問 人的 氏 の生涯についての に心に残った

> のではないかと述べられた。 氏の一生涯は、 言及である。 真宗をよりどころとして関わりつづけた竹内 :落差別をはじめとする様々な社会的課題 一時からご門徒の数も少なく、竹内氏の命終 解散したと聞いている。 竹内氏が住持されていたお寺 豊かな人生であったと言える しかし、藤井氏は

ところ、 現存するすべてのお寺を護持することが現実 と感じた。 ちの使命であり、 的には困難な状況のなかにあって、 お寺の護持相続は、第一の仕事である。 自身の差別意識を問い続けていく歩みがある 私にとって、 真宗の教えを相続することこそ私た 住職としてお預かりし その具体的なかたちとして、 究極する 7





教務所からのお知らせ

【住職任命者

一〇二三年 九月 二十八日付 近江第七組 佛嚴寺 治田 貴宣

哀悼の意を表します。 近江第十一組 ご生前のご功労を偲び、 願通寺 謹 んで

若狭第 前住職 組 一〇二三年 九月 五 種村 俊洋

八十歳

住職 一〇二三年九月二十三日 、寺院教会番号順 敬称略! 楠 義景 五十五歳

【 教務所事務休止のお知らせ 】

ます。ご承知おきください。 大掃除のため教務所を閉所いたし 十二月十九日 (火) は、教区会館

誤植の訂正・お詫び】

講について、内容に誤りがござい の十四日・十五日、 師」と表記されておりましたが、 に掲載されました、 お詫びして訂正いたします。 しくは 本紙十月号 法話は 「平原晃宗師」でした。 (第四○一号) 「輪番 教区別院事業 大津別院報恩 篠岡誓法 八頁

『教区だより』公開講演会

「真宗教団の中の女性たち」 見義 悦子 氏 (富山教区正覺寺) 十一月八日 (水)

十三時三十分より

【会場】 常磐会館(京都教区会館) (十三時より受付開始)

ジにも詳細がございますのでご覧 きしての公開講演会です。 ください ホームページ内、 本紙連載の見義悦子先生をお招 出版部会のペー 教区

【お問い合わせ】京都教務所(担当赤松)





http://www.k-kyoku.net/cat/ introduction/kyoka/shuppan

なった。 期によく家で将棋を指すように を教えてくれたのは自坊の前々住職 を指してもらっていた。外出し辛い時 である祖父で、よく庫裏の縁側で将棋 味の一つが将棋だ。将棋の指し方

ゆる早指しで、こちらが指した手 あり自分でも驚いた。祖父はいわ た。二十年以上忘れていた記憶で た時の記憶がふいに思い出され まったのかと思った。それは珍しいこと があった。自分でも予想外に良い手を いる時に、祖父と将棋を指してい なので嬉しくなり、困っているだろう 指し、祖父は暫し考えるために手が止 が指した一手に手が止まったこと してきていたのだが、ある時自分 に間断なく強力な一手を指し返 四年前、子どもと将棋を指して

うしたん?」と尋ねると、「それでええ と祖父の顔を見上げた。驚いたことに んか?」と言う。盤上に目を戻し考え 私の目をみて、微笑んでいたのだ。「ど もう一度祖父を見ると、「待ってや ると、悪手であることがわかった。

要を行い住職となったが、法要ま で準備に四年かかった。準備を 三十二年前にこの世を去った。 始めてから今に至るまで、祖父の 本年五月に自坊の住職継職 法

3

それから時折同じようなことが るから指し直していいぞ」と言う。

あった。こんな記憶である。祖父は

棋のことではなく行住坐臥、私の言行 頭の中でずっと響いている。それは将 つ一つに対して響いてくる声である。 それでええんか?」という声 出版部会 杉本 智海

常磐会館報恩講

(日時) 【法話】川村 妙慶 師 (僧侶・アナウンサー) 十一月二十一日 火

十六時三十分より (十六時より受付開始

(会場) 【冥加金】お斎あり 二千円 常磐会館(京都教区会館

聴講のみ 千円 ※要事前申込 (十一月八日まで) (記念品)

【お問い合わせ】京都教務所(担当赤松)

している。「坊守って何やろなあ?」という

The editor's note

講演会が開催される ち』が次号で最終回を迎える。そして 十一月八日には著者見義悦子氏の公開 私は坊守と呼ばれ坊守会活動に参加 本誌連載の『真宗教団の中の女性た

も揺さぶられるような感じがあった。文 を聞かせてもらうことに今から少し緊張 章を読むのと直接お話を聞くのとでは感 日々を過ごしている。連載を読んで何度 気持ちはあっても「問う」ことなく漠然と じることも異なるだろう。講演会でお話 (出版部会 前田素子

京都教区 11 月の行事予定

教区・地区・関係団体事業				
8日(水)	13:30 ~ 16:30	『教区だより』公開講演会 ※見義悦子氏 教区会館 2 階 大講堂		
15日(水)	9:30~15:30	坊守会	区会館2階大講堂	
16日(水)	16:30 ~ 18:00	仏教青	年会 声明教室	区会館3階研修室
21日(火)	16:30 ~ 19:00	常磐会館 報恩講 🏯川村妙慶 師 (僧侶、アナウンサー) 教区会館 2 階 大講堂		
30日(木)	13:00~15:00	准堂衆会 女性声明講習会 教区会館 2 階 大講堂		
教区諸会訓	義			
9日(木)	13:30 ~ 16:30	教化推设	性本部 出版部会(Zoom 会議) Z	oom
10日(金)	13:30~16:30	新教区	[準備委員会 財務小委員会 教	区会館2階大講堂
14日(火)	13:30 ~ 17:00	新教区	[準備委員会 教化推進本部 調整協議会 教	区会館2階 大講堂
16日(木)	13:30~16:30	教区則	 	区会館2階大講堂
20日(月)	13:30~16:30	新教区準備委員会 特区小委員会 長浜教務所		
22日(水)	13:00~16:30	部落差別問題に関する改編協議会 教区会館 3 階 役		区会館3階研修室
24日(金)	13:30 ~ 16:30	新教区	【準備委員会 教化・組織小委員会 教	区会館2階 大講堂
教区別院事業				
5日(日)	13:00 ~ 14:00	赤野井	定例法要(教如上人) 蓋輪番 中川眞 師	赤野井別院
5日(日)	14:00 ~ 15:30	伏 見	報恩講 養長紀子 師 (第9組 願念寺)	伏見別院
6日(月)	14:00 ~ 16:00	伏 見	声明作法講座 蕭浅井誠 氏 (🗓 皆演寺)	伏見別院
6日(月)	14:00 ~ 16:00	大津	親鸞講座沙加戸弘師(大谷大学名誉教授)河野貫由師(窓	^{工第} 傳正寺) 大津別院
7 日(火)	13:30 ~ 15:30	山科	同朋の会 출 赤松崇麿 師 (教区駐在教導)	山科別院
14日(火)	14:00 ~ 15:30	伏 見	同朋会 報恩講 竇宮部渡 師 (義慶西稱寺)	伏見別院
15日(水)	13:30 ~ 15:30	山科	定例法話 當谷祐真 師(第4組 真光寺)	山科別院
17日(金)	10:00~11:30	山科	婦人会報恩講 詹輪番 篠岡誓法 師	山科別院
20日(月)	14:00 ~ 16:00	大津	同朋の会 法 廣野一道 師(_{第2組} 寳福寺)	大津別院

教務所閉所予定のお知らせ

12月19日(火) ※常磐会館大掃除のため事務休止といたします。ご承知おきください。



真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 『教区だより』第402号

[発行人] 篠岡誓法(真宗大谷派京都教務所長) [発行所] 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入 Tel:075(351)5260 Fax:075(351)5256

【表紙の写真】落ち葉(石東組 善徳寺 河野恵嗣) 発行日 2023 (令和5) 年 11 月 1 日 メールアドレス: kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派 京都教区 Webサイト https://www.k-kyoku.net

京都教務所

